

Title	指示表現から談話標識へ：「こりや」「そりや」「ありや」を事例として
Author(s)	小川, 典子
Citation	言語科学論集 = Papers in linguistic science (2010), 16: 43-56
Issue Date	2010-12
URL	http://dx.doi.org/10.14989/141359
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

指示表現から談話標識へ

—「こりゃ」「そりゃ」「ありゃ」を事例として*—

おがわ のりこ
小川 典子

京都大学大学院 / 日本学術振興会

norikogawa@gmail.com

1. はじめに

現代日本語にはコ・ソ・アという3系列の指示詞があり、これらの指示詞を含む表現は、名詞（「これ / それ / あれ」「ここ / そこ / あそこ」）、連体詞（「この / その / あの」「こんな / そんな / あんな」「こういう / そういう / ああいう」）、副詞（「こう / そう / ああ」「こんなに / そんなに / あんなに」）、間投詞（「これ / それ / あれ」）等、様々な品詞に広く分布している。

しかしながら、コ・ソ・アの系列における用法の分布は必ずしも対称的ではなく、ソ系列のみにおいて独自に発達した用法が数多く見られる²。これは、例えば『日本国語大辞典』や『現代副詞用法辞典』といった辞書において、「そんなに」が独立した項目として立てられているのに対し、「こんなに / あんなに」は独立した項目として立てられていないことから窺える。中でも接続詞においてこの傾向は顕著であり、例えば「こうして / そうして / ああして」という表現はあるが、コ・ア系列に関しては「そうして」が「そして」になったような音韻変化は見られない（「*こして / *あして」）。また、「これで / それで / あれで」に関しても、接続詞としての用法を確立しているのは「それで」のみである。

「それ+助詞」で接続詞として定着しているものは、「それで」以外にも「それが」「それを」「それに」等があり、研究が進められている（浜田 1993; 飛弾村 2005; 庵 2007 等）。しかし、本研究で扱う「それは」及びその縮約形「そりゃ」については、これまで考察の対象とされることはほとんどなく、用法や特徴の記述さえ進んでいないのが現状である。

本研究では、指示詞を含む表現「これは / それは / あれは」とその縮約形「こりゃ / そりゃ / ありゃ（あ）」³（以下「こりゃ / そりゃ / ありゃ」）を考察対象とし、これらの表現の比較を通して「こりゃ / そりゃ / ありゃ」の特徴を明らかにしていく⁴。その中で、特に「そりゃ」に注目して分析を行い、「こりゃ / ありゃ」とは異なり、「そりゃ」には談話標識と呼べる用法が見られることを示していく。

2. 先行研究

本稿で扱う「こりゃ / そりゃ / ありゃ」という表現を扱っている先行研究はほとんど見られない。本節では、まず縮約形に対する本研究の立場を明らかにし、「こりゃ / そり

ゃ / ありゃ」という表現全体を扱っている数少ない研究として川瀬 (1992) を取り上げる。

2.1. 縮約形に対する本研究の立場

縮約形の定義に関して、本研究は以下に挙げる斉藤 (1991) の定義に従う。

- (1) 現代日本語において、同一と認められる語(句)が異なった複数の音形を持って現れるとき、その音形間の関係において次のいずれかの音声的過程が認められた場合、その認められた方の形を「縮約形」と呼ぶ。
 - a. 音節数の減少(音節の脱落・融合)
 - b. 音数の減少(単音の脱落)
 - c. 音量の減少(音の長さの短縮) (ibid.: 92)

この定義に従うと、本稿で考察対象とする「こりゃ / そりゃ / ありゃ」には、音節の融合による音節数の減少 (1a) と、場合によってはモーラ数の減少という音量の減少 (1c) が認められる(「これは / それは / あれは」は3モーラであり、「こりゃあ / そりゃあ / ありゃあ」の場合はモーラ数が保持されているが、「こりゃ / そりゃ / ありゃ」では2モーラとなり、音量が減少する)。

さらに、斉藤は縮約形を以下の2つに分けている。

- (2)
 - a. 発話の速度が速くなったなどのために、主に生理的な理由で生じたもの
 - b. 音声的な関連はあるが、現代日本語においては発話の速度と全く無関係で、スピーチ・レベルによって使い分けられているもの (ibid.: 93)

斉藤は (2b) のスピーチ・レベルとして、話し言葉的(インフォーマル)、書き言葉的(フォーマル)を想定しており、言い換えればスタイルやレジスターの違いとして縮約形を位置づけている。

この斉藤の縮約形の定義と分類は、縮約形に対する一般の理解を表したものであり、日本語教育等においても広く受け入れられているように思われる。しかし、近年、主に文法化の観点からの研究において、原形と縮約形の関係はスタイルやレジスターの違いにとどまるものではなく、意味的な変化をも伴うものであるという事実が指摘されている(Bybee and Scheibman 1999; Hopper and Traugott 2003: Ch. 3, 4; 上原・福島 2005; 今道・石川 2006; 上原 2007; 張 2011 等)。このような事実は Bloomfield (1933) や Bolinger (1977) 等で指摘され、認知言語学において広く受け入れられている「形式が違えば意味も違う」という考え方を裏づけるものである。本研究もこれらの研究と軌を一にするものであり、縮約形を単なるスタイルやレジスターの違いとしてではなく、ひとつの言語形式として認めるという立場に立って分析を進めていく。

2.2. 「こりゃ / そりゃ / ありゃ」に関する先行研究

本節では、縮約形の一環として「こりゃ(あ) / そりゃ(あ) / ありゃ(あ)」を扱っている川瀬(1992)の研究を確認しておく。

川瀬によれば、これらの表現は、日本語のレ形指示詞「これ / それ / あれ」に主題や対比を表す助詞「は」がついた「これは / それは / あれは」の「れは」の部分が「re + wa → rya」という音韻融合によって生じたものであるという(*ibid.*: 6)。

さらに、川瀬は「縮約形「こりゃ」「そりゃ」「ありゃ」」は、事物のみでなく「こりゃ困った」のように事態・状況等の取り立てにも広く用いられる」(*ibid.*: 17, 角括弧内は筆者による付加)ものであるとし、その意味機能を「提題」としている。

川瀬の研究は、縮約形がぐだけた会話で使われることを指摘するだけにとどまらず、さらに縮約形の文法的特徴として意味・用法の変容を指摘している点で重要である。しかし、川瀬が挙げている「こりゃ困った」は「これは困った」としても事態・状況等を取り立てることができ、縮約形と原形では取り立て方がどのように異なるのかが明らかになっていないことが問題点として挙げられる。

3. 事例の観察

本研究では、『CD-ROM 版 新潮の100冊』をデータとして用い、そこに出現した「こりゃ」(210例)「そりゃ」(1126例)「ありゃ」(62例)について、「これは / それは / あれは」との置き換え可能性を検討した。以下において、「こりゃ」「ありゃ」「そりゃ」の順で、それぞれの表現について事例の観察と特徴の記述を行う。

3.1. 「こりゃ」

「こりゃ」の事例を観察すると、ほとんどが「これは」で置き換え可能であるが、以下の例のように「これは」と「こりゃ」が使い分けられ、置き換えると不自然になる例も観察された。

- (3) 「いやいや、ぼくは酒はやらないんで。さあ黒田君、さあ三瓶^{みつびん}、あなた方でやって……。ぼくはねえ君、これを飲む。これはボルドーといってね、ボルドー、こりゃあ名前がいい。ぼくはこれが一番でね」そう言って基一郎は自分のコップにはボルドーをつがせた。ボルドーといっても、ボルドー酒とは縁もゆかりもない飲料である。アルコール分は全然なかった。それは当時売りだされた赤い色をした甘いサイダーのことなのだ。 (北 杜夫『楡家の人びと』)

(3) では、「これは」と「こりゃあ」が使い分けられている。「これは」の指示対象は目の前にある物体としてのボルドー(サイダー)であり、「こりゃあ」の指示対象は「ボルドー」という名前そのものである。「これは」は「こりゃ(あ)」に、「こりゃあ」を「これは」に

置き換えると不自然になるように思われる。

次の例においても、「こりゃ」を「これは」で置き換えると文は不自然になる。

- (4) ふたりの子供の声が（中略）戸の外で聞えた。ふたりはなにかをひきずって来て、落したところだった。「だから、いったでしょう。屋根の上にお客さまをのせてはいけないって」女の子は英語で叫んだ。「さあ、早く拾いなさいよ」《こりゃ、なにもかもめちゃくちゃだな》オブロンスキーは思った。《ああやって、子供たちも勝手に、走りまわっている》（トルストイ『アンナ・カレーニナ』）⁵

(4) では、オブロンスキーは聞こえてくる音から外の様子を想像しているのであるが、「こりゃ」を「これは」に置き換えると、実際に外の様子を見ているという解釈が強くなり、前後文脈と矛盾することになるため、文は不自然になると考えられる。

「こりゃ」と「これは」は、明らかに置き換え不可能という例が少ないため一般化の材料に乏しいが、以上2例から敢えて指摘するとすれば、「こりゃ」は「これは」に比べて指示性が低く、具体物の指示には使いにくいということが考えられる。

3.2. 「ありゃ」

「ありゃ」の事例において「あれは」の置き換え可能性を検討したところ、ほぼ全ての事例において置き換えが可能であった。ただし、「こりゃ」の場合と同じく具体物の指示には使われにくく、非具体物を指示して「ありゃ」が使われている文脈で「あれは」に置き換えると不自然になる例が見られた。

- (5) 「…ただきみはどうして、例えばだな、あのおかみに食事をとめさせるようなへまなことをしたんだい？ それから、あの手形だが、ありゃいったいなんだい？ ほんとに、頭がどうかしたんじゃないのか、手形に署名するなんて！…」
（ドストエフスキー『罪と罰』）

(5) の「ありゃ」は単に「手形」を指すのではなく、「署名した手形」を指示していると考えられる。この例において「ありゃ」を「あれは」で置き換えた場合、「手形」そのものを指す解釈が強くなるように感じられる。

3.3. 「そりゃ」

「そりゃ」の事例を観察したところ、「そりゃ」が具体物を指示する例が1例のみ確認できた。(6)において、「そりゃ」は「それは」で置き換えることが可能である。

- (6) 「何だ、そりゃ。やにふくらんでるじゃねえか」「塩であります」

(大岡昇平『野火』)

事例が少ない上に、(6)は倒置がかかわる例であるため妥当性に欠けるが、今回用いたデータの範囲では「こりゃ / ありゃ」に見られたような、具体物を指示しにくいという特徴は「そりゃ」には確認できなかった。

さらに、「そりゃ」には何を指示しているのか明らかではない事例が観察された。

- (7) 《でも、世間の人はアンナを攻撃している。それはなぜかしら？ それじゃ、あたしのほうがましだとでもいうのかしら？ そりゃ、あたしには、すくなくとも、自分の愛している夫がいるわ。…》 (トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

(7)は「そりゃ」の指示対象を特定することができず、また「それは」で置き換えることが困難である。さらに、(7)の「そりゃ」は(6)とは異なり、「そりゃ」が述語の表すイベントの参与者(以後、益岡・田窪(1992)にならって「補足語」と呼ぶこととする)になっていない点で大きく異なる⁶。

3.4. 観察のまとめ

以上、本節では「こりゃ / そりゃ / ありゃ」の事例を観察し、その特徴を明らかにした。「これは / それは / あれは」との置き換え可能性を検討した結果、「こりゃ / ありゃ」は具体物の指示には用いにくいという傾向が見られたが、今回用いたデータに関しては、「そりゃ」にはそのような傾向は確認できなかった。

また、「こりゃ / そりゃ / ありゃ」が補足語になっている用法は「こりゃ / そりゃ / ありゃ」に共通して確認できたが、補足語になっていない用法は「そりゃ」に顕著に認められた。

次節では、特に「そりゃ」に注目し、(i)「そりゃ」が補足語になっている用法と、(ii)「そりゃ」が補足語になっていない用法の2つの用法に注目して分析を行っていく。

4. 「そりゃ」に焦点を当てた分析

本節では特に「そりゃ」に焦点を当て、前節の観察から明らかになった(i)「そりゃ」が補足語になっている用法と、(ii)「そりゃ」が補足語になっていない用法について、節を分けてそれぞれ詳しく見ていく。なお、以下の議論では「それは」と「そりゃ」の意味の違いを詳細に観察するため、作例を用いて分析を行う。

4.1. (i)「そりゃ」が補足語になっている用法

この用法については庵(1995)で一部触れられているため、まず庵の説明を見ておく。

庵(1995)は「ソノN」と「ソレ」の違いを考察する中で、「ソレ」にはモーダルな用法

へずれ込んでいいると考えられる例が見られることを指摘し、そのような例の特徴として、「これは」が使えることと、縮約形「そりゃ」が使えることの2点を挙げている。このモーダルな用法へのずれ込みについて、庵は「述部が話者の感情を表すものである点が関与的であるようである」と述べ、以下のような例を挙げている。

(8) A: Nが大麻で捕まったの聞いたか?

B: a. ああ。{それは / #これは / ?そりゃ} さっきデスクから聞いた。

b. {それは / これは / そりゃ} 大変だ / 驚いた / 事件だ。

(庵 1995: 636 (一部形式を変更して引用))

(8b) からは、「これは」(さらにその縮約形「こりゃ」)、「そりゃ」もモーダルな用法を持つことが示唆されるが、庵自身はこの点について何も述べておらず、「そりゃ」が使用可能であることを指摘するにとどまっている。また、「こりゃ」や「ありゃ」についても触れられていない。

本研究では、「話者の感情」がかかわるという庵の指摘について、より正確に「話者の評価」とし、分析を行っていく。

以下の例において、「そりゃ」は述部において話者の行っている何らかの評価が表されている場合に使用可能である。このことから、「それは」の一部の用法についての庵の指摘が、「そりゃ」にも当てはまることが分かる。

(9) A: パソコンを使いたいなら、図書館に何台か置いてあるよ。

B: a. {それは / そりゃ} 便利だね!

b. {それは / ??そりゃ} 誰でも使えるの?

また、(9)の例を指示対象という観点から考えてみると、(9a)の「それは / そりゃ」は「図書館にパソコンが何台か置いてあること」を指示しているが、(9b)では「パソコン」という具体物を指示しており、「そりゃ」を使うと容認度が下がる。3節において指摘した「こりゃ / ありゃ」は具体物を指示しにくいという傾向を考え合わせると、「そりゃ」の使用の適否を左右する要因としては、述部における話者の評価があるかどうかだけではなく、指示対象が具体物か否かという条件も関与している可能性が示唆される。以下において、この2つの条件とその関係について詳しく見ていく(なお、補足語になる用法は「そりゃ」だけでなく「こりゃ / ありゃ」にも共通の用法であるため、以下においては「こりゃ / ありゃ」も含めて議論する)。

まず、「こりゃ / そりゃ / ありゃ」が具体物を指示しており、さらに述部における話者の評価が見られない例においては、以下に示すように「こりゃ / そりゃ / ありゃ」が不自然になる。

- (10) A: この本どこで買ったの?
B: {それは / ??そりゃ} 生協で買ったよ。
- (11) A: その時計いくらだったの?
B: {これは / ??こりゃ} 1万円だったよ。
- (12) A: ここに置いてあった箱どこやったの?
B: {あれは / ??ありゃ} 捨てたよ。

3 節において、「こりゃ / ありゃ」は具体物を指示しにくい傾向が見られることを指摘したが、以上の作例から分かるように、この傾向は「そりゃ」にも当てはまることが確認できる。

次に、「こりゃ / そりゃ / ありゃ」が具体物を指すが、述部に話者の評価が現れている例を見てみよう。

- (13) A: この絵、どう思う?
B: {これは / こりゃ} 素晴らしいね!
- (14) A: このバッグいいでしょ。
B: {それは / そりゃ} ニセモノだよ!
- (15) A: あの魚、何だろうね?
B: {あれは / ありゃ} 絶滅したはずのクニマスじゃないか!

これらの例において、「こりゃ / そりゃ / ありゃ」の使用は自然である。このことから、指示対象が具体物か否かにかかわらず、述部における話者の評価の存在が「こりゃ / そりゃ / ありゃ」の使用の自然さに関与する要因であるということが分かる。

なお、述部自体がない以下のような例では、「こりゃ / そりゃ / ありゃ」は不自然となる。

- (16) a. 「あっ、これは!」「あっ、それは!」「あっ、あれは!」
b. *「あっ、こりゃ!」「あっ、そりゃ!」「あっ、ありゃ!」
- (17) [夫のシャツに口紅がついているのを見つけた妻が]
妻: これ何よ?
夫: あっ、{それは / *そりゃ} !

(16)(17) では、「何らかの対象 / 夫のシャツについた口紅」を見て驚いて（あるいは慌てて）いる。これらの例では述部が後続しないために話者の評価が現れておらず、文は不自然になると説明できる。

以上の分析から、(i) の「そりゃ」（ひいては、「こりゃ / そりゃ / ありゃ」）が補足語

になっている用法において、「そりゃ」が自然に使われ得るには、述部に話者の評価が現れていることが必要であることが明らかとなった。

4.2. (ii) 「そりゃ」が補足語になっていない用法

(i) の用法では、「それは」が自然で「そりゃ」が不自然となる例が見られた。本節で扱う (ii) の用法では、「そりゃ」が自然で「それは」が不自然となる例が多く見られる。

(18) A: 映画、2本も見てきたの？

B: {そりゃ / ??それは} せっかくシネコンに行ったんだから。

(八木 (2006: 158) を一部変更して引用)

(19) A: 彼のこと、好きなんでしょ？

B: {そりゃ / ??それは} 好きだけど…。

これらの例ではいずれも、話者が「そりゃ」以下の内容について「もちろんである / 当然である」という評価を下していることが強く感じられる。この「もちろんである / 当然である」という評価が「そりゃ」の使用に必要であることは、以下の例から明らかになる。

(20) A: 息子さんが一流の野球選手として活躍なさって、さぞかし嬉しいでしょう。

B: a. ??そりゃ息子が活躍しても別に嬉しくないよ。

b. そりゃ息子が活躍して嬉しいよ。

Aの発話から、AはBが嬉しがっていることを予想していることが分かる。しかし (20a) では、Aの予想に反してBは息子の活躍を嬉しく思っていない。この例では「もちろん / 当然」という評価が存在しないので、「そりゃ」の使用は不自然である。一方 (20b) はAの予想通り息子の活躍を嬉しく思っており、「もちろん / 当然」という評価を下しているため、「そりゃ」の使用は自然である。

次の例は、Bの発話に関しては (20) と同じであるが、Aの発話にはBが嬉しがっていることを予想しているという意味は読み取れない点で (20) と異なる。

(21) A: 息子さんが一流の野球選手として活躍なさっていますが、どう思われますか？

B: a. ??そりゃ息子が活躍しても別に嬉しくないよ。

b. そりゃ息子が活躍して嬉しいよ。

Aの発話にBが嬉しがっているという予想が含まれないにもかかわらず (21a) が不自然になるのは、「親は自分の子どもが活躍すれば嬉しい」という一般的な知識による。つまり、息子が活躍することに対する肯定的な評価が期待されるにもかかわらず、それが裏切られ

るため、(21a)は不自然になるのである。

(20a, b)、(21a, b)は容認度に差が認められるのに対し、(22a, b)はどちらも自然である。

(22) A: 息子さんとは昨年親子の縁を切られたそうですが、最近の息子さんの一流の野球選手としての活躍は嬉しくないですか？

B: a. そりゃ息子が活躍しても別に嬉しくないよ。

b. そりゃ息子が活躍して嬉しいよ。

(22a)は「息子とは縁を切った(ので今は関係ない)」という前提に対する「もちろん / 当然」という評価が「そりゃ」によって表されている。(22b)も自然であるが、これは先ほど指摘した「親は自分の子どもが活躍すれば嬉しい」という前提に対する「もちろん / 当然」という評価が「そりゃ」によって表されていると考えられる。

なお、(ii)の用法の「そりゃ」は「それは」で置き換え困難であることを先に指摘したが、実際には「それは」にも(ii)の用法と呼べる事例が観察された。

(23) …けれども下の者は、あたしのような下っ端は、人間の中に入れて貰えないのだから。それはあたしは出来のわるい女です。そんなことは重々承知してます。でも少しは人間扱いしてくれたっていいじゃないの。(北 杜夫『楡家の人びと』)

(24) そして作戦を、まず中腰となって突っぱるという作戦を、蔵王山に教えてやって頂戴。いいですか、誰からとは言わないで、或る相撲の専門家からの伝言だと言って、この作戦を伝えて頂戴。そうすれば蔵王山は必ず勝ちます。それは勝つのが当たり前ですわ。康三郎さん、それを大至急やって下さい。

(北 杜夫『楡家の人びと』)

(25) なぜならば、私たちの周囲で野球のリーダーたちは、ほとんど不良であるか、または不良がかった少年ばかりだったからだ。こんな事を書くと、おれは不良じゃない野球少年だった、と抗議が出るかも知れない。それは確かに真面目な野球少年や、野球部員も少なくなかっただろう。しかし、野球の花形選手やボスが、少年達の日常でも、やはりボスである場合が多かった事是否定出来まい。

(五木寛之『風に吹かれて』)

(ii)の用法の「それは」に特徴的なのは、「確かに」や「当たり前」といった意味を含む表現が同時に使われている点である。言い換えれば、「それは」を(ii)の用法として使う場合、文脈的な支えが必要なのである。一方、「そりゃ」の場合、(ii)の用法を保証する文脈的な支えを必要としない。これは、「それは」「そりゃ」が応答詞として用いられた以下の例からも示される。

(26) A: 例の件、上手くいってるんだろうね?

B: {そりゃ / それは} …。

(26) において「そりゃ」が使われると、「上手くいっている」ということが含意されるのに対し、「それは」が使われると、「上手くいっていない」ということが含意される⁸。このことから、この「もちろん / 当然」という評価は、「そりゃ」に付随する意味と考えて良いと思われる。

4.3. 考察

(i) 「そりゃ」が補足語になっている用法と (ii) 補足語になっていない用法を比較すると、(i) では指示対象が特定可能であるのに対し、(ii) では「そりゃ」の指示対象が特定できない。(i) の用法において、「そりゃ」は「それは」に比べて指示性が低いことを指摘したが、(ii) の用法では「そりゃ」がさらに指示性を背景化させ、順接の内容が後続することを示すと共に、「もちろん / 当然」という話者の態度を示す談話標識としての機能を担うようになったと考えるのが妥当である。(i) の用法の段階では述部に表出していた話者の評価が、(ii) の段階では語用論的強化により「そりゃ」という表現自体に付随するようになった例であると考えられよう。

また、このような違いが生じた原因としては次のような仮説が立てられる。「それは」が縮約されて「そりゃ」となり、助詞「は」が「りゃ」の部分に取り込まれたことで、「は」が持つ主題や対比を表す意味から解放されて述部との関係が曖昧になり（つまり「それ+は」としての分析性が低下し）、「そりゃ」が別の機能を担うものとして再分析されたのではないかと考えることができる。形態素の分析性に関しては、Langacker (1987)、山梨 (2000)、Hopper and Traugott (2003) でも触れられているが、ここでは Lakoff (1993) のモデルを用いて、形態素と語と音声の対応関係を以下のように示す (M: morphemic, W: phonemic / word, P: phonetic)。

M:	s	o	r	e	+	ɯ	a		M:	s	o	r	e	+	ɯ	a		M:	s	o	r	j	a	
															*									
W:	s	o	r	e		ɯ	a	>	W:	s	o	r	j			a	>	W:	s	o	r	j	a	
						*																		
P:	s	o	r	j			a		P:	s	o	r	j			a		P:	s	o	r	j	a	

図1: 「それは」から「そりゃ」への縮約に伴う段階性⁹

図の左端は、音声上の要請に従って音声 (P) が「そりゃ」に変化した段階であり、縮約はあくまで音声現象にとどまっている。図の中央は、縮約が音声だけでなく語 (W) としても定着した段階であり、この段階では形態素 (M) レベルで「それ+は」という分析性が

保持されている。図の右端は、形態素レベルの分析性も低下し、新しい形態素としての「そりゃ」が生じた段階である。

このモデルはあくまで仮説であるが、縮約の起こるプロセスとしては非常に自然であると考えられる。そして、この中間段階(図の中央)が(i)の用法に、最終段階(図の右端)が(ii)の用法に当たると考えれば、「そりゃ」のそれぞれの用法(特に談話標識としての「そりゃ」)の特徴が自然に説明できるように思われる。

5. おわりに

以上、本稿では「こりゃ / そりゃ / ありゃ」の意味・用法を、これらの縮約形の原形である「これは / それは / あれは」との置き換え可能性という観点から観察し、その特徴を明らかにした。「こりゃ / ありゃ」は置き換え可能なものが多くを占めたが、「そりゃ」については、置き換え不可能なものが多く観察された。この「そりゃ」は、(i)「そりゃ」が補足語になっている用法と(ii)補足語になっていない用法の2種類がある。作例による分析を行った結果、(i)の用法では、「それは」と異なり、「そりゃ」(そして「こりゃ / ありゃ」)には述部における話者の評価の表出という制約があることを確認した。(ii)の用法については、話者の「もちろん / 当然」という評価を表す談話標識として機能していることを指摘するとともに、「それは」は文脈的な支えがないと(ii)の用法として成り立たないのに対し、「そりゃ」は話者の評価が表現自体に付随するようになっており、語用論的強化として説明できることを指摘した。さらに、Lakoff (1993) のモデルに基づき、「そりゃ」の縮約プロセスのモデルを提示した。このモデルは「そりゃ」のそれぞれの用法を説明する上で有効であったが、それと同時に、今後他の縮約現象を分析していく際の足がかりとなることが期待される。

今後の課題としては、本稿で考察の対象外とした間投詞的用法・副詞的用法と本稿で扱った用法との関係を、歴史的な変遷も含めて明らかにすることが挙げられる。

注

* 本稿は、中日理論言語学研究会、京都言語学コロキウム、談話語用論研究会(だんご研)において発表した内容を修正・発展させたものである。発表の際、山梨正明先生、田中廣明先生、沈力先生、李長波先生、出口雅也氏、岩田真紀氏、遠藤智子氏、横森大輔氏をはじめ、多くの方々から貴重な指摘・コメントをいただくことができた。特に図1の形態素と語と音声の対応関係についての議論は出口氏に負うところが大きい。記して感謝したい。なお、本稿に不備や誤りがあれば、それは全て筆者に帰するものである。

また、本稿は科研費(特別研究員奨励費 21・3200)の助成を受けたものである。

1. 名詞の「これ / それ / あれ」が LH (L: Low, H: High) と発音される一方、間投詞の「これ / それ / あれ」は HL というアクセントで発音される。ただし、「あれ」に関しては LH という発音も可能である(e.g. 「あれ? どうしたんだろう」)。

2. 例えば、仮定内指示 (e.g. 「もし特急電車が留まっていたら、{*これ / それ} に乗って行こう。」(金水・田窪 1990: 105)) や、いわゆる曖昧指示 (e.g. 「おでかけですか」「ええ、ちょっとそこまで」(ibid.: 103)) 等が挙げられる。
3. 関西方言では「そら」(e.g. 「そらあかんで」) という言い方もあるが、本稿では「そりゃ」で代表させることとし、「そりゃ」と「そら」の(方言やスタイル以外の)違いについては今後の課題とする。
4. 注1で述べたことと関連するが、本稿で扱う「こりゃ / そりゃ / ありゃ」は LH で発音されるが、「こりゃ / そりゃ / ありゃ」には同じ語形で HL と発音される間投詞的用法がある(同じ語形で間投詞的用法とそうではない用法が見られるという点で「これ / それ / あれ」と「こりゃ / そりゃ / ありゃ」は平行している)。

(i) さて若殿様は平太夫を御屋形へつれて御帰りになりますと、そのまま、御廐の柱にくくりつけて、雑色たちに見張りを御云いつけなさいましたが、翌朝は勿々あの老爺を朝曇りの御庭先へ御召しになって、「こりゃ平太夫、その方が少納言殿の御恨を晴そうと致す心がけは、成程愚には相違ないが、さればとて又神妙とも申して申されぬ事はない。が、美福門のほとりは、ちと場所がようなかったぞ。…」

(芥川龍之介『羅生門・鼻』)

(ii) 「へい」と筒抜けの高調子で、亭主帳場へ棒に突立ち、「お方、そりゃ早うせぬかい」女房は澄ましたもので、「美しい聲音やな、何処の？」と聞く。

(泉鏡花『歌行燈・高野聖』)

(iii) 「誰だい？」進んできた男が呼びかけた。ジョードは答えなかった。ミューリーは近づいてきた。ずっとそばまできて、やっと顔を見わけた。「ありゃ、こいつは驚いた」と彼は言った。「トミー・ジョードでねえだか。いつ出てきただ、トミー？」

(スタインベック『怒りの葡萄』)

本稿で扱う対象と間投詞的用法は関連する可能性が高いが、アクセントが異なるため、安易に関連付けて説明することに対しては慎重にならなければならない(指示詞の間投詞化を無批判に受け入れることに疑問を呈し、アラ・アレといった間投詞(感動詞)を通時的観点から再検討した研究としては深津(2010)を参照のこと)。間投詞的用法との関連については今後の課題とし、本稿では以降の分析において間投詞的用法は扱わないこととする。

5. 日本語訳「こりゃ、なにもかもめちゃくちゃだな」の部分は、ロシア語原文では《Bce смешалось...》(逐語英訳: everything mixed)、英語訳(Constance Garnett 訳)では“Everything's in confusion”となっており、指示詞は用いられていない。
6. 「そりゃ」が何を指示しているのか明らかではない例としては、他にも以下のような例が見られた。

(i) 「ほんとうにね、シュレムスカヤ先生はそりゃ熱心でいらっしゃいますの。…」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

(6) と比較してみると、(i) の「そりゃ」は全体にプロミネンスを伴って発音されることが分かる(「それは」で置き換えたとしても、やはりプロミネンスを伴って発音される)。また、(i) において「そりゃ」は副詞が生起する位置にあり、「とても」等の程度副詞で置き換えることも可能であることから、本研究では (i) を副詞的用法と考える。このような副詞的用法は「こりゃ / ありゃ」には観察されず、「そりゃ」に特有のもののようなものである。副詞的用法の「そりゃ」は (6) の「そりゃ」と同語源であり、深く関連していると思われるが、この用法については存在を指摘するにとどめ、本稿では分析の対象外とする。

7. なお、「そりゃ」が自分の発話を受ける例においても、容認度は変わらない。
 - (i) 図書館の中に何台かパソコンが置いてあるんだけど、{それは / ??そりゃ} 誰でも使っていていいんだよ。
8. ただし、「もう」を付加して「それはもう」にすれば「上手くいっている」ということが含意される。
9. 音声表記は IPA (International Phonetic Alphabet) に基づく。

参考文献

- Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. London: George Allen & Unwin.
- Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. London/New York: Longman.
- Bybee, Joan and Joanne Scheibman. 1999. "The Effect of Usage on Degrees of Constituency: the Reduction of *don't* in English." *Linguistics*. 37(4): 575-596.
- 張 又華. 2011. 「日本語アスペクトに関する認知言語学的研究—補助動詞の分析を中心に—」, 京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士学位論文.
- Clark, H. H. 1996. *Using language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 深津周太. 2010. 「中世末期のアラ系感動詞—各形式の成立と定着に関する試論—」, 『名古屋大学国語国文学』103: 142-128.
- 浜田麻里. 1993. 「ソレガについて」, 『日本語国際センター紀要』3: 57-69. 独立行政法人 国際交流基金.
- 飛弾村 遙. 2005. 「指示詞と接続詞のかかわり再考—「それ+で」から「それで」への連続性」, 『立教大学ランゲージセンター紀要』14: 3-20.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott. 2003. *Grammaticalization* (second edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- 出口雅也. 2003. 「認知音韻・形態論とコネクショニズム」, 吉村公宏(編)『認知音韻・形態論』155-193. 東京: 大修館書店.
- 今井晴彦・石川慎一郎. 2006. 「縮約がもたらす構文の意味的・機能的変化—言語コーパスに基づく *there is / there's* 構文の研究—」, 『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』3: 15-36.
- 庵 功雄. 1995. 「ソノ N とソレ」, 宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下)』632-637. 東京: くろしお出版.
- 庵 功雄. 2007. 『日本語におけるテキスト結束性の研究』東京: くろしお出版.
- 川瀬生郎. 1992. 「縮約表現と縮約形の文法」, 『東京大学留学生センター紀要』2: 1-24.
- 金水 敏・田窪行則. 1990. 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」, 日本認知科学会(編)『認知科学の発展』3: 85-116. 東京: 講談社.
- 近藤泰弘. 1990. 「構文的に見た指示詞の指示対象」, 『日本語学』9(3): 31-38.

- 近藤泰弘. 1992. 「レ系指示詞の意味論的性格」, 文化言語学編集委員会 (編) 『文化言語学 : その提言と建設』 365-376. 東京: 三省堂.
- Lakoff, George. 1993. "Cognitive Phonology." In John Goldsmith (ed.). *The Last Phonological Rule: Reflections on Constraints and Derivations*. 117-145. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, vol.1: Descriptive Application*. Stanford, California: Stanford University Press.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 (改訂版)』 東京: くろしお出版.
- 斉藤純男. 1991. 「現代日本語における縮約形の定義と分類」, 『東北大学日本語教育研究論集』 6: 89-97.
- 上原 聡. 2007. 「認知形態論」, 上原 聡・熊代文子 『音韻・形態のメカニズム』 (講座 認知言語学のフロンティア) 153-209. 東京: 研究社.
- 上原 聡・福島悦子. 2005. 「「やっぱ、丁寧に話しちゃいますんで」—丁寧体の会話におけるくだけた表現の使用」, 南 雅彦 (編) 『言語学と日本語教育IV』 61-72. 東京: くろしお出版.
- 八木真生. 2006. 「「そりゃそうだ (それはそうだ)」の意味機能—「 ϕ そうだ」と比較して—」, 『言葉と文化』 7: 151-163. 名古屋大学.
- 八木真生. 2007. 「「それはない」の意味機能」, 『言葉と文化』 8: 173-185. 名古屋大学.
- 山梨正明. 1986. 『発話行為』 東京: 大修館書店.
- 山梨正明. 1992. 『推論と照応』 東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.

辞書

- 『日本国語大辞典』 第二版. 2000. 東京: 小学館.
- 『現代副詞用法辞典』 飛田良文・浅田秀子. 1994. 東京: 東京堂出版.

コーパス

- 『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』 1995. 東京: 新潮社.

参考資料

- Толстой Лев. *Анна Каренина*. Азбука Классика 2008.
- Leo Tolstoy. (Constance Garnett 訳) *Anna Karenina*. Project Gutenberg 1998.